オピニオン

生み出すべきなのは お金だけではない

日本オリエンテーリング
協会副会長 村越 真

JOA 財政難

今、日本オリエンテーリング協会（JOA）は未曾有の財政難に遭遇している。

もっとも財政難は今に始まったことではない。1990 年代に、行政の組織である JOLC から民間の協会となって以来、潜在的には JOA は常に財政の危機にあった。1990 年代にはメインスポンサーの森永乳業が年間 1000 万円近い支援をしていたはずだ。また、2000 年代に入ってからは、その森永の大野会長の肝いりで集められたオリエンテーリング振興基金のお陰で、財政難は潜在的なものに留まっていた。それと裏腹に、自律した協会の運営にはそれなりのお金がいるのだということが、多くのオリエンティアの目から隠されてきた。

「財政難だ」という危機感は、多くのオリエンティアがこれまで潜在的であった組織運営の財政的問題に関心を持つという意味でいいことだとさえ言える。これを機会に生み出すべきは実はお金だけではない。

まず第一に活力である。

「昔は良かった」というのは多くの年寄りの常套句だが、確かに 1990 年代くらいまでのオリエンテーリング界は今よりも活力があり、活気に満ちていた。今はトレイルランニングやロゲイニングなど周辺に多くのスポーツがある。高齢化や少子化によって昔のような賑わいは難しいだろう。だが、ブームのトレイルランニングに関わっていると、1970 年代の黎明期のオリエンテーリングのリーダー層に見られた熱気や情熱を感じることがある。このような熱気なしに、スポーツは発展しない。

普及や強化で思うような結果が出ていないことがオリエンテーリング界の情熱を奪ったのかもしれない。だが、強化や普及の根源的な目標に立ち返れば、活性化のためにやれることは、案外身近にあるのかもしれない。

第二に誇りである。

オリエンテーリングを 40 年以上やっていて、もっとも悲しかったことの一つに、「新入生にはトリム（オリエンテーリングウェア）を見せないようにしよう」という取り決めをして新勧をする大学があると知ったことだ。確かに伝統的なオリエンテーリングウェアは格好いいとは言えない。ならば自分でかっこいいと思えるスタイルを追求したらいい。ウェアは競技のシンボルとも言えるものだ。自分のスポーツ、競技であることに誇りを持てなければ、情熱も生まれない。

誇りが持てないのは、かっこわるいウェアのせいばかりではないのではないか。オリエンティアの多くが、オリエンテーリングという競技の持つ価値、社会的貢献に気づいていないように思える。

レスリングのウェアはかっこいいだろうか。もし吉田沙保里がいなかったらあれを着て人前に立ちたいと思う女の子はいないだろう。仮にライフセービングのウェアがかっこ悪くても、彼らはリアルに人を助けている限り、そのウェアを着ることを恥ずかしいとは思わないだろう。

誇りを持てるスポーツにすることは組織の責任であると同時に、愛好者一人一人から生まれるものである。

第三に組織の主体であるという意識である。

官の組織である JOLC から JOA になった時、競技者一人一人が主役であり、その主役による、主役のための組になったはずだった。しかし、オリエンティア一人一人の中に、あるいは各都道府県組織の中に、自分たちこそが全国組織の構成員であるとともに、その前途に責任を持つという意識が生まれただろうか。行政から出て行くことを余儀なくされた時、新しい受け皿を作ることに早急であったあまり、新しい意識への転換が追いつかなかったのではないかと思える。

今回の財政改革の中心は、もちろん会費の問題や登録費である。そこには私達組織の運営を預託されたものの責任がある。それと同時に、オリエンテーリングに関わる人全てが主体的な意識を持たなければ、財政問題の根幹にある活力やそれを支える誇りを生み出すことができなければ、それは短期的な問題解決に過ぎない。その事をオリエンテーリングに関わる全ての人に訴え、愛好者の、愛好者による、愛好者のための組織への改革へのご協力をお願いしたい。

（村越 真）